

和紙

だより

越前和紙への提言



■木村翼沙(きむら つばさ)

京都市在住。2001年龍谷大学文学部卒業。2003年京都教育大学大学院美術教育書道専修終了。高校書道第一種免許取得。幼少より書を学び、大学時代より本格的に書活動を開始。大学院では「墨蹟の書法」の研究を行い、多数の作品制作を行う。伝統書を主に学びながら、京都妙心寺、兵庫県立美術館など、国内外で数々の個展・招待出展を行う。布作品や空間を意識した立体作品など、様々な素材で展開する斬新な作風は現代美術においても注目され、近年は、プロダクトデザイナーとのコラボで商品開発や企業の社是の受注、海外企業のロゴマークを担当するなど活動の幅を広げている。大阪中之島のアトリエにてワークショップを含む「書の教室」主宰。

<http://www.kimuratsubasa.com>

■木村翼沙さん(書家)
「素材が引き出す書の可能性へ」

●「書」事始め

幼い頃より習字はやっていましたが、高校生の頃から、筆一本で世界を吟遊詩人のように、旅人になって自分の詩を作って、詩を吟じ、残していくようなことに憧れて…(笑) そういうことを行う手段として「書」というものを捉えていて、世界に行くからには、しっかりとしたスキルを身につけなくては考えました。大学院で勉強した後、京都の西本願寺で字を書くお仕事をやっていました。回りの先輩からは「失敗は若いうちにしろ」と言われていましたので、今考ええると無謀でしたが、最初のうちは年間十回ぐらいの個展に力を注ぎ、とにかく自分の作品を世の中に問うてみることに集中しました。

書道の世界ではよく「文房四宝」といわれ、筆、墨、硯、紙が重要な賞玩の対象とされ、書の追求には欠くことのできない要素とされます。私の場合は主に漢字を書くので、受け止めてくれる紙は、墨をよく吸い、漢字のじみやかすれ、筆のしなりがうまく紙に伝わる中国の紙がいいと感じています。現在は稲藁(わら)と檀皮(だんぴ)を配合していると言われる「紅星牌」という紙が気に入っています。

二〇〇五年、京都の新風館で「Crowd-群れ」という個展をやったときに、和紙を研究されている方から、因州、越前、土佐、成子、門出、阿波など有名な和紙のことを教えて頂き、初めて和紙に字を書きました。書家は日常、紙は扱っているのですが、実はいろんな種類の和紙を目にすることも、情報もあまりないのです。

それは書の団体に席を置いていても、個人でも環境はそう変わらないと思います。もつとアートに特化した紙の店が身近になれば嬉しいですね。

●素材や道具から引き出される作風

ひとつの紙だけにこだわる人もあれば、道具や紙が変わることで作品に引き出される表現が違い、それが面白いという人もいます。私は後者のタイプでしょう。面白い紙、珍しい紙も探しています。字がのるということを考えると、書作品としては、主張しすぎないシンプルな和紙がいいと思います。

二〇〇七年京都市美術館「第十三回 尖展」招待作家作品



平面にとどまらず、空間全体にインスタレーション風の作品を展示したいと考え、シルクオーガンジーやファイユという化学繊維にも文字を書きました。ある時、紙布が目止まり、機械漉きの紙布に書いてみました。紙布は和紙でもあるし、布でもあるし、墨ののり具合も表現にかなない、空間演出もできたので、自分の中ではイメージしていた表現がすっきり統合できたという感覚がありました。使った紙布は様々な折り目のものがあり、一見麻みたいで

ですが、墨のしみこみ方がよく、裏打ちしなくてもよいので空間演出に向いていました。今追求している作品は筆に鳥の羽を用いたもので、筆を作成し、百本百様の作品に挑戦しています。柔らかくてふわふわした羽の痕跡を残すには、どんな紙がいいか。墨も薄くしないと筆にまとわりついてのびやかな字にならず、バランスが崩れます。道具や素材の追求が常に必要ですね。

●ことば・意味・文字「社是」

私の書く言葉は自分の詩ですが、意味はありません。日常作っている文章をコンピュータの中でコピー&ペーストなどで一旦バラバラにし、それを日本語の文法としては通る文章にするのですが、中身がない言葉にします。字は「意味」がありますが、意味をなくして「字」を書くことの果てに何が見えるかに興味があります。近代技術と融合させ、利用することにも違和感はありません。

そのような考えとは逆に、コラボして頂いているプロダクトデザイナーの方が二〇〇七年からプロデュースしてくれたのが「社是」という



社是社訓シリーズの書。「情熱の人」

ジャンルです。自分自身が変わった部分が大きく、言葉や字を扱うという事は、書の逃れられない宿命でもあり、長い精神性や歴史の重みを携えているものだと思われました。それまでは照れくさくて「生懸命」や「愛」なんて書いたことがありませんでした。



運営している「書」の教室は、少人数制で初心者から経験者まで、一人一人に合ったオリジナルカリキュラムで、「個性を大切にす

る書・生活を彩る書」を目指しています。小学校の「習字」は国語科の科目で、文字を正しく書くための書写ですが、表現や芸術としての「書」は全く違うものです。文字やモチーフ、道具は同じですが、中身や目的が変わつたら、考え方も変えていかなければなりません。「基本コース」古典臨書(かな・漢字)、「クリエイティブコース」作品制作「カスタムコース」やりたいことを形にするお手伝い、「通信コース」の四コースがあり、現在三十人ほどが学んでいます。



2008年、200点余りを出品した兵庫県立美術館での「木村翼沙10th書展」。コンサートに合わせた書のパフォーマンスも。



■第一八回 和紙文化講演会 「和紙の素材力を語る」漉き手との交流の中で

二〇一〇年十二月二十三日、東京渋谷区の昭和女子大学グリーンホールで、和紙文化研究会(個人会員七十余名、賛助会員二十三社)主催による年次講演会「和紙の素材力を語る」漉き手との交流の中で」が開催された。減少し続ける手漉き和紙の厳しい状況に対して、同研究会がどのような役割を果たせるのかを探る試みで、まず漉き手の話をじっくり聞き、交流することから始めてみようというのが今回のテーマ。和紙研究者、漉き手、製紙メーカー、文化財修復、アーティスト、小売店、博物館員、学生など参加者約八十名は、熱心な討議に聞き入っていた。

●第一部「漉き手からのメッセージ」

手漉き和紙の生産者を、一、家業を継いで伝統的な紙を主に漉くタイプ、二、収入源を他に持ち自己表現として紙を漉くタイプ、三、外から入りその地域の伝統を意識しながらも独自の紙を漉くタイプ、四、使用目的を定めた紙を漉くタイプ、と分け、各々を代表する漉き手から和紙の世界に入った動機や契機、制作する紙を取り組んできたこと、現状の問題点や課題などについてスライドを交え発表があった。

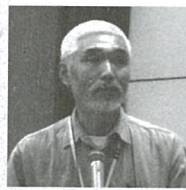


西田誠吉氏

代々紙漉きの家に生まれ七代目の西田誠吉さんは石州和紙の漉き場を六人のスタッフで営む典型的な一タイプの。二〇〇九年、

ユネスコの無形文化遺産にも登録された石州和紙・石州半紙は石州楮を100%使い、現在で

は原材料を絶やさないために自家栽培を行っている。過疎で生産農家も減少し一年分の材料を集めるのも大変であるが、和紙本来の素材力を活かすのが生きる道と考えるという。西田さんの紙は文化財修復の下張り用には定評があり、たて揺れのみで漉くことで、縦には裂けるが横には強い紙が可能になる。最近では、デザイナーと商品開発をすることやエンドユーザーとの直接取引も増えてきた。人材育成も素材力のひとつの考え、後継者養成、販路の開拓、広報に力を入れようとしている。



三宅賢三氏

趣味の版画から紙に興味を持ち、紙漉きを習った三宅賢三さんは現在京丹後市の牧場で働きながら、竹紙を漉いている。

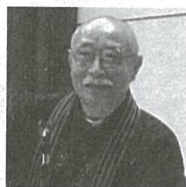
竹紙を作る前は丹後地方のちりめん糸くずで絹100%の紙が出来ないものかと研究を重ねたこともあった。竹紙は製法が本には余り載っていないため、試行錯誤の連続だったという。日本で普通に用いられる材料より数段手間のかかる竹紙の製法がスライドで紹介され、参加者の興味をそそる。最大の特徴は繊維が折れないように煮熱中に攪拌せず、後に空気に触れないようにして水の中で発酵熟成させることにある。熟成した繊維は殆ど叩解しなくてもよい程柔らかくなる。できた紙は雁皮のようだが、繊維が細かく光沢があり、表面も滑らか。後継者は今のところおらず自分一人で終わるかもしれないが、データは細かく取つてあるので、分かりやすい竹紙製法の説明を残したいと三宅さんは語る。

印刷会社勤務中に阿波和紙ワークショップに参加し、手漉き紙に興味を持った上埜暁子さんは、長野県北信州木島平の「内山手すき和



上埜暁子氏

紙体験の家」で働いて十六年目になる。かつては良質な障子紙として知られていた内山紙の最大の特徴は、冬期に材料の楮を夜間寒気に当て、凍らせた後、水に浸して黒皮を除去した後、晴れた日に雪の上に並べ太陽の紫外線で白皮を白くする「雪晒し」だ。体験の家は観光施設でもあるので、日頃、生活実感から紙を漉くことを心がけているという。タペストリー、絵画のような障子紙、あかり、うちわ等のインテリア関連の製品や手作りジャムのラベル、和紙のコサージュ、ブライダルのウエルカムボード、人形、カード、花嫁衣装のオーナメントなどが紹介され、地域との繋がりを大切にし、和紙の文化を共有し再発見していくような活動を続けたいと上埜さんは語る。



内藤恒雄氏

静岡県富士宮市に、富士山の見える紙漉き場を構える団塊世代の内藤恒雄さんは、アーティストの望む紙を永年にわたつて提供してきた。大学生の時のカナダ旅行で、自国の誇れる文化を強く意識するようになり、日本独特の世界に誇れる手漉き和紙に興味を持った。石州、出雲、越前、美濃、小川倉敷等で学んだ後、昭和五十一年独立。問屋さんに紙を卸すことは余りせず、直接紙を使ってくれそうな作家を訪ね、セールスをして歩いた。使った感想を聞き、作家の望む紙を聞いて試作を重ね、紙を提供するスタイルは、今では日本画家、版画家、書家、文化財修復家、手工芸家の信頼を集めている。二〇〇七年には、還暦と独立三十周年を記念し「駿河半紙技術研究会」を設立し、実技研修、講演会や学習会を

行っている。

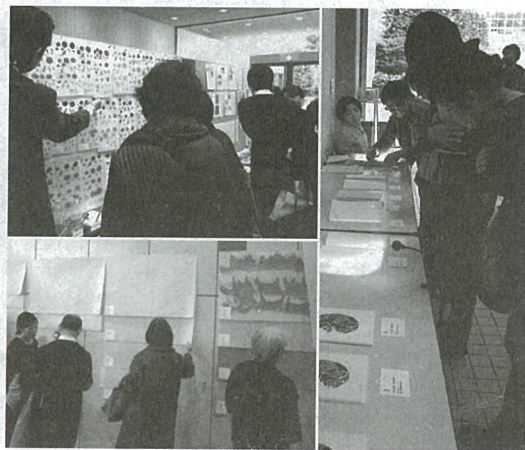
●第一部「手漉き和紙を体験」

エントランスホールでは、昼の休憩を含め二時間弱の時間を取り、漉き手が制作した様々な紙、その紙を用いたアーティストの作品がご本人の説明付きで展示され、参加者は活発な情報交換を行うことができた。使い手の作品は、風墨画、ランプ、木版画、ルリユールを応用したアルバム、墨画、インクジェットプリンターを使用したグラフィック作品、ハンドエンボス、写真、墨色変化を作品にしたもの等で、改めて和紙の素材力を確かめるよい契機となった。

●第三部「今の和紙・明日の和紙」

和紙研究の増田勝彦氏の司会で、発表した漉き手の皆さんと、和紙に関わる小売、学者、問屋、輸出、文化財修復の方々がそれぞれの立場から、現在の和紙を巡る環境や課題を語り、未来に向けての新たな試み等もスライドで紹介された。

多くのことが語られたが、いくつかを挙げる



エントランスホールの「手漉き和紙を体験」の様相

と、直接コミュニケーションで使い手の声をよく聞くこと、和紙のファン作りのための宣伝・周知・啓蒙・教育活動が重要、趣味やアートなどでの高級用途をもっと開拓すべき、日本人は和紙を自然素材と見るが、海外では先端素材として捉えられている点を活かす、漉き手のビジネス力、経営力を付け、流通の調整力と協力する態勢を、海外では特に機能面だけでなく、和紙の文化性・情緒性・精神性を伝える力が大切、と次々に意見が出た。

最後に、同研究会の機関誌編集長を永年務めた吉野敏武氏は「最高級の手漉き和紙の伝統は維持すべき課題で、和紙文化研究会の今後の活動使命もここにあっては」と締めくくった。

パネルディスカッションの様相



■和紙を通じて日中アート交流

二〇一〇年十月十六〜二十四日、和紙の墨絵版画、造形作品などを通して、日中の紙文化の交流を図ろうというイベントが、福井県和紙工業協同組合を中心に約十日間にわたって催された。今回の企画は、北京中央美術学院などに留学経験を持つ和紙作家の青木里菜さんが、中国の美術家や教授に呼びかけ、実現にこ

ぎつけたもので、福井県のヤングアートフェスティバルにも参加。北京在住の日本人版画家中国人水墨画家など五人が来日し、青木さんと合同展覧会やワークショップを開催した。

●中国水墨画の伝統

日中は、同じ紙の文化や芸術を共有する国であるが、作品に込める思想や伝統、アカデミックなシステムには大きな違いがあることが、浮き彫りになったと青木さんは語る。中国の美術系大学で「お家芸」ともいえる水墨画は、殊の外大切に扱われており、画仙紙については国の専門研究機関もあるほどだ。水墨画家になるには、特に筆や墨の使い方に習熟しなければならず、筆の運び方も、ねかしたり、毛の流れに逆らったり、あらゆる角度から筆を使う技法があり多彩だ。又一本の筆に一度墨を付けただけで、その墨がなくなるまで、かすれや細い線などを駆使した絵が描けるような修練も必要とされる。また描かれる絵は個人の表現というより、思想や美学などの哲学が根底にあり、ジャンルによって求められる格式が異なるという。山水画は大自然の威厳と壮大さをいかに描写するかを最重視するため、写実を越えた独特の遠近法が用いられ、中国絵画の中で最も難易度の高い分野とされる。一方、花鳥画は祝いの席やごやかな宴を演出する絵画として社交的な場に飾られることが多い。山



は人間に気質を与えるものとして尊ばれ、政治家の後ろによく飾られるのはこの理由による。絵は、画(絵)・書(言葉)・印(落款)をもって、ひとつの水墨画として完成され、その配置は「氣」の流れに沿っていないと見なされる。

●中国の紙・日本の紙

様々な中国水墨画の文化的背景を語ってくれた美術家の皆さんは、日本の紙の使い方に驚いたそうだ。中国では紙は書画用紙に使われるのが主流であるが、日本は現在でも住居用に障子、襖、壁紙、インテリア照明などが使われる他、和紙の雑貨や小物が目を引き、多様な使われ方をしている。博物館に行けば、紙衣沓(くつ)、張り子、紙布、祭礼の道具、はては風船爆弾も見られる上、旅館ではおいしそうな具材をのせた紙鍋も見られる。又、紙と竹、紙と漆、紙と木のような異素材の組み合わせも多く、このことは日本独自の紙文化として西洋人もよく指摘する事だ。

中国の紙産地は、著名な画家を多く輩出している浙江省の隣の安徽省に多いが、需要は主に書画用紙で、筆圧、筆運びの速度、重ね描き、墨の濃度によって、滲みが程よく止まり多様な表現を可能にさせる紙だ。サンプル張などは画家に頻繁に配られているそうで、材料は楮、藁、麻、竹など。中国人参加者の一人、浙江大學芸術学院講師の沙偉(しゃゝゝ)さんは、越前



卯立の工芸館での合同作品展



前和紙の襖紙に竹林の絵を描いたが、「一流の画家はその紙の長所を引き出すものだ。紙も筆も時も選ばない。大役を授かり光栄だ。」と感想を述べた。

●成果

会期中は、作品八十点余りを展示した合同作品展の他、紙漉き場訪問、一般参加者や中学生と共にを行った木版画教室、中国画教室、写生会や日本の水墨画グループとの水墨画交流会、ハイキングなどのお楽しみ会もあり、盛り沢山のハードスケジュールにも拘わらず、参加者は秋の紙の郷の風情を楽しんだ。今回の催しの成果を青木さんに何うと「同じ紙でもこれだけ文化が違うことが分かり、収穫があった。また越前和紙全体で皆さんが受け入れてくれたので、今後も機会があれば国内外の美術家とこの様な企画を設け、越前和紙のブランド力を高めて行きたいと思えます。」と答えが返ってきた。

中国画教室での中学生の作品



抱負を語る青木里菜さん

■特別企画展「お札のふる里 越前和紙」開催
越前和紙とお札の関わりを紹介する企画展「お札のふる里 越前和紙」古文書・古紙・道具にルーツを探る」が、二〇一〇年十一月一日〜二七日、福井県越前市「卯立の工芸館」で開催され、話題を呼んだ。

日本で最初の藩札は寛文元年に発行された福井藩札で、越前五箇で漉かれた。又明治新政府が発行した全国通用の太政官札にも越前和紙が採用される。その後一時、紙幣用紙はドイツからの輸入紙に頼っていたが品質の面から再び越前和紙が見直され、明治八年（一八七五年）、越前五箇から加藤賢門、山田藤左衛門ら七名の紙漉き技術者が紙幣寮抄紙部に招聘された。山田らは明治十年、三椏を原料として溜め漉き法により精微で耐久力の素晴



日本で最初の福井藩札（復刻）
寛文6年（1661）
越前和紙青年部会が平成2年に作製したもの

らしい紙幣用紙を開発し、明治十五年に精巧な「黒透かし」に成功。ここに近代日本の紙幣が完成。その技術は、株券などの局紙に受け継がれ、越前和紙を特徴付ける基本技術の一つとなっている。

紙の文化博物館所蔵の貴重な品々が、時代別「藩札」（江戸時代）、「太政官金札」（明治維新）、「日本銀行券」（紙幣の近代化）、「抄紙部」（昭和のお札漉立て）に展示された。二十二日には、日本銀行福井事務所長、松原淳二氏を迎え、「日本銀行券と越前和紙」と題する講演会も開催され、越前和紙の歴史を垣間見る絶好の機会となった。

情報欄

●イベント情報

■平成23年「漉き始め式・年賀式・年賀交換会」

時：平成23年1月5日（水）午前10時～
場所：卯立の工芸館（越前市新在家町）

■「越前和紙展」

時：平成23年1月13日（木）～2月6日（日）
場所：福井市 ふくい工芸舎
展示・即売あり

■東京えちぜん物語「伊東屋展」

時：平成23年1月18日（火）～24日（月）
場所：東京 伊東屋本店

■東京えちぜん物語「展示商談会」

時：平成23年2月14日（月）～15日（火）
場所：東京 新宿パークタワー

■越前・若狭の物産と観光展（東京展）

時：平成23年1月27日（木）～2月1日（火）
場所：東京 新宿京王百貨店
即売あり

■伝統的工芸品展2011

時：平成23年2月24日（木）～3月1日（火）
場所：東京 池袋東武百貨店

編集後記

京都に本拠を置く「日本・紙アカデミー」のスタディーツアーに参加しました。和紙の研究で知られた寿岳文章氏ゆかりの和紙博物館「寿岳文庫」（杉原紙研究所）を訪ねました。昭和12年（1937）から15年にわたって夫妻で日本全国の紙漉き産地を調査した記録「紙漉村旅日記」は圧巻。芹沢銈介や柳宗悦の見事な装丁本などもあり、そういえばこの頃の本は電子ブックといい、何とも味気ないなあと感じることしきりでした。（よ）

東京えちぜん物語
～Echizen Craftsman's Meeting～
クリエイトを刺激する「越前」のモノづくり

昨年、好評だった
「東京えちぜん物語」
商談会の模様



季刊・和紙だより 第29号（2011年冬号） 発行日：2011年1月7日

発行人：福井県和紙工業協同組合 山田益弘 〒915-0234 福井県越前市大滝町11-11 TEL: 0778-43-0875 FAX: 0778-43-1142

編集所：右衛門佐美佐子事務所 〒606-8225 京都市左京区田中門前町90 TEL: 075-712-8834 FAX: 075-702-6223 E-mail: m-yomosa@smail.plala.or.jp

編集人：右衛門佐美佐子・田中裕子

※無断での転写・転載はお断りします。